神戸新聞　2016年(平成28年)8月7日　日曜日

著者に聞く

湊かなえさん
「ポイズンドーター・ホーリーマザー」

「娘がタイトルを見て『悪口書いたんちゃうか』って。違うのに」と笑う湊かなえさん＝東京都文京区

「毒親」の本性、新たな視点で

『毒親』という言葉に乗っかって、母親が一方的に責められている。なんかおかしいんじゃないかな。お母さんにも言い分があるはず」。子どもの生き方や人生までも支配しようとする親の姿がテレビなどでエキセントリックに強調される中、そうした風潮に疑問を投げかけ、毒親とレッテルを貼られた母を新たな視点で見つめ直す。

6編からなる短編集の2編「ポイズンドーター」と「ホーリーマザー」を表題にした。「白が黒になったり、逆に黒が白に見えたり。そんな対になる話にしたかった」

「ポイズンー」では主人公の女優・藤吉弓香の視点から、長年にわたり意のままに自分を操り、束縛してきた母親が「悪者」として描かれる。裏返って「ホーリーー」では、弓香が知るよしもなかった、慎み深く慈愛に満ちた姿が、弓香の友人やその義母の語りから浮かび上がってくる。

テレビや書籍で近年広がってきた「毒親」という言葉。テレビ番組で有名人が親に虐げられてきた過去をこのおどろおどろしい言葉で「断罪」することもある。「親は放送後につらい生活を強いられるかもしれない」と親の心情を思いやる。言葉が独り歩きする中で親が安易に批判される空気に危うさも感じる。「誰にも話せないほど本当に悩んでいる人の声が隠れてしまっているんじゃないかな」

衝撃のデビュー作「告白」以来、読後に嫌な気分になるミステリー「イヤミス」を多く手掛け、「イヤミスの女王」と呼ばれるようになった。最近は毛色の違う作品も書いていたが、本作で「原点回帰」となった。「読者を嫌な気分にさせようと思って書いているわけではないんですけどね」

人気作家になっても洲本市で夫、中学生の娘と暮らすスタイルは変わらない。「東京の作家さんに怒られるかもしれないけれど、『自分は日本の中心で書いている』と思っていたら、それまで。地方で書いて全国に受け入れられる作品はそのまま世界にも通じる」

本作にはほかに姉妹の奇妙な関係を描いた「マイディアレスト」など。

（藤森恵一郎・東京支社）

（「ポイズンドーター・ホーリーマザー」は光文社・1512円）

みなと・かなえ　1973年広島県生まれ。武庫川女子大卒。「告白」で本屋大賞、「ユートピア」で山本周五郎賞。洲本市在住。